

文化としての医療

木村 快

現代座代表、劇作家

医療にかかわる人々の話を舞台のドラマにしてみたいと思ったのは7年前のことである。医療は誰にとっても身近な問題であり、観客にとってもなじみやすい題材ではないかと安易に考えたのが間違いだった。取材を始めてみると、医療の世界はわたしが考えていたような生やさしいものではなかった。

まず医療従事者から話を聞くこと自体が大変だった。なにしろ24時間体制の過密スケジュールをぬって会う約束をとりつけねばならない。あらためて、医療という世界が苛酷な労働によって支えられている事実と、その結果、医療の世界が一般社会とは切り離された空間にならざるをえなくなっていることを知らされた。

何年かの取材を通じて思ったことは、病院は単に治療の場である以上に、独特の人間空間であるということだった。

病院へやってくる人は、どんな人でも患者になった瞬間いっさいの社会的立場や肩書きをはぎとられ、一方的に医療者に依存せざるをえない立場に置かれる。おずおずと受付に向かい、ひたすら医者判断を待ち、看護婦にすぎるようなまなざしを向ける。文化的な視点からすると、現実社会の中でこれほど率直な状態の人間の間はないだろう。そういった意味では、病院というところは患者にとって日常社会とは一線を画した場であり、聖なる場所である。逆に医療従事者は、一目置かれるという形で、社会的に孤立させられている面もあったと思った。

医療経営の悪化や看護労働の過重などがどう解決されていくのかを考えると、やはり気になる

のは現代社会が孤立化と細分化の方向を辿っていることである。医療の危機は本来、受益者である国民一般の責任で解決すべき問題であるが、一方で患者の大病院志向が強まっているということは、人間に対する信頼より、高度の施設や技術に対する信頼にすがりつかざるをえない状況に患者が追込まれているということである。

現代医療の深刻さはもはや医療問題ではなく人間のあり方としての日本人の文化が問われているのだと思う。医療をみんなのものにするためには、当面の矛盾を解決する対症療法と同時に、人間同士のきずなを新しく創造する努力が大切だろう。だが、医療問題がそういった文化的視点から論議されることは少ない。たとえば医療者が患者を通じて及ぼす社会的影響の大きさを考える時、医療者教育にもっと社会的視点が強化されていると思うし、待合室が老人のサロン化しているという問題についても、地域の人間的な拠点としての病院機能をどう考えるかという視点があっていいと思う。

そんなことを考えながら、わたしのドラマは去年の春、やっと上演にこぎつけた。取材を始めてから7年目である。作品の仕上がりがどうだったかは観客の評価にゆだねなければならないが、この仕事を通じて多くの医療人と知り合えたことは、とても大きな収穫だったと思う。タイトルは医療者への期待をこめて、『朝の風に吹かれて』と名づけた。さまざまな矛盾を抱え、時には逃避的になりながらも、危機に瀕した命に対しては理屈抜きで全力を傾ける人々に、爽やかな朝が訪れてほしいと思う。